

はじめに

皆さんは世界史の概説書やドキュメンタリー番組などを通して歴史を眺めるとき、「人」を見ますか、それとも人々が活躍する舞台である「世界」を見ますか？ おそらく、まず「人」の動きにひかれ、当時の「世界」の構造やしくみに意識を向けるのは次の段階になるのではないのでしょうか。

小説や漫画、ドラマなどの物語は、登場人物に加えて舞台設定や世界観が大事です。どんなに魅力的なキャラクターがそろっていても世界観がお粗末ではその作品の面白さは半減します。なんとなれば、登場人物の心性や行動指針を規定しているのはその物語の世界観だからです。

世界史という物語も同様です。確かに世界史は「人」が過去にとった営みの集積です。まず注目すべきは「人」でしょう。しかし、世界史を理解するうえで、当時の「世界」という舞台設定への理解は不可欠です。個々の人物の行動や様々な事件は必ずや「世界」の制約を受けているはずです。「世界」の構造理解が不十分であるとき、世界史は単なるできごとの羅列になってしまう、カオスだと感じられるのです。これが、いわゆる世界史がわからないという状態で

す。

そこで本書では「世界」という舞台の構造に着目することで世界史への理解を深める手がかりを提供しようと思います。

ここで不思議に思う読者がいるかもしれません。

本書は『「皇帝」の世界史』とのタイトルを掲げて「皇帝」という「人」を主題としているのに、注目すべきは「人」ではなく「世界」の方であるとはどういうことなのでしょうか？

結論を最初に申し上げます。

「皇帝」は「世界史」の舞台を作りあげる存在であり、「世界」そのものです。

世界史を眺める定点に「皇帝」を据えて世界史のカオスを脱する機会を探っていきましょう。